

2021年9月26日聖霊降臨後第18主日説教

民数記 11 章 4-6、10-16、24-29 節

ヤコブの手紙 4 章 7-12 節

マルコによる福音書 9 章 38-43、45、47-48 節

本日礼拝に出席された方で、池ノ上駅をお使いになった方はお気づきだと思いますが、会堂北側壁の補修工事が完了しました。真っ白に塗られた壁がまぶしいくらいにきれいです。現会堂設立当初の色に近いと思いますので、60年前は、丘の上で白い教会が美しく光っていたのだらうと推測されます。

さて、本日の旧約日課の「民数記」の物語は、エジプトから脱出したイスラエルの民が、嘆く個所です。8月1日の礼拝で、出エジプト記 16 章を学びましたが、そこにも類似する物語があります。しかし、この「民数記」には、「出エジプト記」にはない特徴があります。

聖書日課では省略されている個所ですが、11 章 1 は、「民は主の耳に達するほど、激しく不満を言った。主はそれを聞いて憤られ、主の火が彼らに対して燃え上がり、宿営を端から焼き尽くそうとした」とはじまります。民の不満の内容は書かれていませんが、それは相当激しく、それに対する主なる神様の怒りも、「焼き尽くそうとした」とありますので、かなり激しかったようです。モーセがとりなしをして、主なる神様の怒りは鎮まったのですが（11：2）、本日のお話は、その直後になります。焼き尽くされそうになるほど主なる神様を怒らせたにもかかわらず、また不満を言ってしまったのが、今日のお話です。

しかし、この個所では、「民に加わっていた雑多な他国人は飢えと渴きを訴え」とあります。そして、「イスラエルの人々も再び泣き言を言った」と続いています（11：4）。先ほどの 11 章 1 節にある「民」は、どのような人々であるか明確ではありませんが、ここの表現からイスラエルの民であったことが暗示されます。ただし、「民に加わっていた雑多な他国人」という表現は、意識です。直訳すれば、「彼らの中の群衆・集まり」となります。この「群衆・集まり」に相当する言葉は「旧約聖書」では、ここにしか用例がありません。それゆえ訳語の確定は困難ですが、かつての口語訳では、「**彼らのうちにいた多くの寄り集まりびと**」となっており、新しい聖書協会共同訳では、「**民の一部の輩**」となっています。古い口語訳は直訳に近い翻訳といえます。新共同訳は、出エジプトにかかわった集団の特性を示した意識、つまり、出エジプトの民とは、イスラエルに限らないということ強調した意識といえます。それに対して、新しい聖書協会共同訳は、お話の流れを意識して解釈を加えた意識といえます。つまり、1 節から 3 節で不満を言って、主なる神様を怒らせてしまったが、なんとかモーセにとりなしてもらったイスラエルの民であった（多分反省していた）が、彼らの中にいるほかの人々が不満を口にしたので、それに誘発された（つられた）ということです。なんとなく、イスラエルは悪くないと弁解しているようにも思えますが、たとえそうであったとしても、ここで描かれている事柄は、イスラエルの弁解の

記述ではないと思います。この嘆きは、イスラエルの人々にとって、二回目であり、「雑多な他国人」の模範となるべきであったがなれなかった、ということの意味しているからです。イスラエルの人々も、マナでは満足できなくなってしまっていたのでしょう。「ああ、肉が食べたい。われわれは思い起すが、エジプトでは、ただで、魚を食べた。きゅうりも、すいかも、にらも、たまねぎも、そして、にんにくも。しかし、いま、われわれの精根は尽きた。われわれの目の前には、このマナのほかに何もなし」(11:4-6)と極めて具体的に嘆いているからです。

聖書日課で省略されている7節から9節には、「マナ」の説明が書かれていますが、そこには味についての説明もあります。ただし、新共同訳では、「このあるクリームのような味であった」ですが、口語訳では「**その味は油菓子の味のようにであった**」とあり、聖書協会共同訳では「**油を含んだようなものの味**」となっています。文字だけから味を想像するのは困難ですが、「脂肪・油」に相当する意味の言葉があります。そして、その「あぶら」は、聖別で用いる油の時と同じ言葉ですから、日本語の「あぶら」と同じで、動物性・植物性の両方の意味があります。「あぶら」があるので、カロリーはそれなりに高いと思いますが、毎回それでは確かに大変であったでしょう。

この人々の嘆きは、指導者であるモーセを苦しめます。「モーセは、民がどの家族もそれぞれの天幕の入り口で泣き言を言っているのを聞いた。主が激しく憤られたので、モーセは苦しんだ」とある通りです(11:10)。1節から3節では、主なる神様の怒りを民との間に立ってなだめたモーセでしたが、苦情を言う民と、怒られる主なる神様との板挟みの状態で耐えられなくなり、ついに主なる神様にモーセ自身が嘆いてしまうのです。その嘆きの具体的内容が、11節から15節にあります。最後は、「どうしてもこのようになさりたいなら、どうかむしろ、殺してください。あなたの恵みを得ているのであれば、どうかわたしを苦しみに遭わせないでください」とありますので、かなり深刻です。

結末を先取りしますと、主なる神様は、このモーセの嘆きを聞き入れ、民に肉(うずら)を与えて、その嘆きに応えます。しかし、このお話の大切なところは、肉(うずら)を与える前に、まずモーセの嘆きを解決したということです。それは、「主はモーセに言われた。『イスラエルの長老たちのうちから、あなたが、民の長老およびその役人として認めうる者を七十人集め、臨在の幕屋に連れて来てあなたの傍らに立たせなさい。』」とはじまります(11:16)。主なる神様は、問題の表面は、民の不満であることを認めつつ、その不満を聞きくと同時に主なる神様とのやりとりを行うことを、モーセ一人に担わせることが困難だとも認識し、その構造から改革するのです。今日でいう抜本的構造改革をしたのでした。そうしなければ、モーセの悩みが解決しないと見抜いていたということでしょう。そのために主なる神様の指示は、17節まで続きます。

18節から20節まで肉に関する指示が、続きますが、聖書日課ではその個所は省略されています。ただしそこには、「あなたたちがそれを食べるのは、一日

や二日や五日や十日や二十日ではない。一か月に及び、ついにあなたたちの鼻から出るようになり、吐き気を催すほどになる。」(11:19-20) という主なる神様の具体的な言葉があります。少しユーモアを感じる個所です。

モーセは、この主なる神様の言葉にある、七〇人による分業に関して疑問は抱かなかったようですが、食料調達の可能性には疑問を持ったようです。この個所も聖書日課には省略されていますが、主なる神様はそのようなモーセの問いに答えます。「主の手が短いというのか。わたしの言葉どおりになるかならないか、今、あなたに見せよう」(11:23)。影響力や実行力など強さを示す表現に、「手が長い」という語句があるのはこの個所が起源かもしれません。

さて、聖書日課は、「モーセは出て行って、主の言葉を民に告げた。彼は民の長老の中から七十人を集め、幕屋の周りに立たせた」(11:24) と、モーセが主なる神様の指示通りにするところからつながっていますが、別な問題が起きてしまいました。それは、七〇人のほかに、宿営に残っていた「エルダドとメダド」という二人が預言状態に入ったことです。そのことをモーセに告げて、主なる神様の指示通りになるようにと助言するのが、「ヌンの子ヨシュア」です。のちに、モーセの後継者となるヨシュアです。イエス様のヘブライ語名です。

このヨシュアは、「わが主モーセよ、やめさせてください」とモーセに語ります(11:28)。それが批判であるのか、助言であるのかわかりませんが、少なくとも、主なる神様の七〇人という人数や召命の条件を守ろうとしたことは確かです。しかし、モーセは、「あなたはわたしのためを思ってねたむ心を起こしているのか。わたしは、主が霊を授けて、主の民すべてが預言者になればよいと切望しているのだ」と語ります。ここにある「ねたむ心を起こす」の「ねたみ」は、出エジプト記3章4節14節にある「熱情の神」(新共同訳)、「ねたむ神」(口語訳)、「妬む神」(聖書協会共同訳)にある言葉と同じで語根です。文字通り羨ましがめる妬みから、熱く思うというような熱情的な状態も意味するのですが、いずれにしても少し意味が分かりにくいところがあります。それゆえ、ヨシュアが、なぜそのように語ったのかは不明ですが、大切なことは、後半部分の「わたしは、主が霊を授けて、主の民すべてが預言者になればよいと切望しているのだ」という部分にあると思います。

本日の旧約日課「民数記」(11:1-29)の前半部分は、「出エジプト記」の物語と同じように、この世的欲望が尽きないという人間の悪い部分の本質を示していました。しかし、後半部分は、そのお話を基にして、預言者は、何のために存在するのか、そのことを示していると思います。さらにそこから、イスラエルとは何のために存在しているのか、そのことをも示していると思います。

後にモーセの後継者となるヨシュアは、モーセを「わが主」と呼びました。この言葉から、ヨシュアがモーセを尊敬していたことが分かります。しかし、モーセは、「主が霊を授けて、主の民すべてが預言者になればよいと切望しているのだ」と答えます。モーセは、自分がなぜ預言者として民を率いているのか、その目的を深く知っているのです。その目的とは、イスラエルの人々すべて、そして

一緒におる他の人々も、主なる神様を信じて歩み続けることです。預言者は、そのためにいるのです。同時に、イスラエルが存在する目的を示しています。それはイスラエルの歩みを通して、他の民族が、主なる神様を信じる大切さを知るためなのです。

さて、この旧約日課と、福音書の共通点は、弟子が、師匠の行いを理解しないで、何かをやめさせようとした、その点になるかと思います。ただし、両者の目的は異なっています。ヨシュアは、モーセのためを思って、モーセの行動をやめさせようとしたといえるのですが、イエス様の弟子たちは、「先生、お名前を使って悪霊を追い出している者を見ましたが、わたしたちに従わないので、やめさせようとはしました」と語っています。自分たちに従わないため、つまり、自分たちの特権や主導権を守るためでした。弟子たちは、なぜ自分たちがイエス様に従っているのか、そのことを理解していなかったのです。いわゆる、弟子の無理解というモチーフが、ここでも明確になっています。

先週の個所で、弟子たちは、誰が一番偉いかと議論をして、イエス様に「一番先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい」と教えられていました。しかし、それでも、弟子たちは、自分たちが、なぜイエス様に従っているのかを理解できないのでした。

そして、イエス様は、「はっきり言うておく。キリストの弟子だという理由で、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる者は、必ずその報いを受ける」と続けます。この部分は、何が従うということなのかを明確にしています。悪霊を追放するなど、大きな奇跡を行うことは大切です。しかし、その目的は苦しんでいる人を助けるためであって、自分の満足のためではありません。それゆえに、一杯の水を飲ませるといふ小さなことであっても、「キリストの弟子であるという理由で」、つまり、イエス様に従っているという意味で行ったのであれば、主なる神様が認めてくださるのです。結果も大事かもしれませんが、目的をしっかりと持っていることが大切です。

教会の歩みも同じです。現代において、わたしたちはイエス様の弟子であり、またモーセに率いられたイスラエルでもあります。これからやっとわたしたちの東京聖三一教会の歩みも、礼拝を始めとして再開します。しかし、この公禱の礼拝休止期間、わたしたちの歩みは、ただ止まっていたわけではありません。それぞれの場所で祈りがささげられ、聖書が読まれ、主なる神様を求め続けていたと思います。そして、その歩みを多くの方々が支えてくださっていました。それは、主なる神様が呼びかけ、導かれている集まりが、簡単には崩れないことを示しています。同時に、二年間に及ぶ公禱礼拝休止の期間は、わたしたちの教会の歩みを改めて振り返る時であったとも思います。わたしたちの歩みの中で、主なる神様を示すために何が大切であるかを、振り返る時です。その振り返りと、新しいあゆみへの気づき、それらの中でから、この二年間から未来に向けた大きな意味を見出すことができると思います。これからご一緒に礼拝で祈り学び、聖餐の恵みにあずかりながら、その意味を見出していきたいと思います。